「郵便飛行士サンテグジュペリ」

作　四方田直樹

【登場人物】

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ　飛行士。作家。　ー　アントワーヌ
リゲル　飛行士。アントワーヌの同僚。　ー　リゲル
マルシャル　機関士。飛行機の整備員。　ー　マルシャル
エラーブル　飛行士。アントワーヌの後輩。　ー　エラーブル

キツネ　砂漠に住むキツネ（フェネック？）アントワーヌの話し相手。
　真実はこの世を去る直前のサン＝テグジュペリなのだが無自覚。　ー　キツネ

前説

前説　「皆さんはアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリをご存知でしょうか？」

前説　「１２０年ほど前に生まれたフランスの作家です。星の王子様の作者といえばお分かりになる方もいると思います」

前説　「星の王子様が有名なので童話作家と思っている方も多いでしょうが、彼が書いた童話的な物語は星の王子様くらいです。彼は大人向けの小説を書く小説家でした。星の王子様も大人向けといえば大人向けですよね」

前説　「サン＝テグジュペリはもう一つ職業を持っていました。飛行機のパイロットです」

前説　「１９２６年。今から１００年ほども前ですね。２６歳の彼はトラックを売る営業の仕事をやめて飛行機で郵便を運ぶ航空会社のパイロットに再就職しました」

前説　「第一次世界大戦が終わり、その際製造された飛行機の多くが役目を失っていました。それなら旅客機としてお客を乗せて……いえいえ、この頃の飛行機の安全性はまだまだ低くてお客さんを乗せて飛ぶにはまだ危険な乗り物でした。そこで考えたのが飛行機便。郵便物を飛行機で運ぶんです。インターネットもファックスもない時代です。世界最速の郵便です」

前説　「あの人のもとに少しでも早く手紙を！そんな強い思いから飛行郵便は誕生した……というわけでもないようです。戦争が終わって余った飛行機の再利用案の一つとして国が後押ししてスタートしたという感じのようです。ともかくサン＝テグジュペリはそんな郵便飛行機のパイロットの一人として、フランス南部のトゥールーズからモロッコのカサブランカへ郵便を運ぶ航路を担当することになりました。このお話は任務地であるカサブランカに赴任した頃から始まります」

1

１９２６年
カサブランカ郊外。上空。

ラテコエール航空会社のフランス（トゥールーズ）―カサブランカ間の郵便飛行士として採用され、研修を受けて正式採用されたアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリがカサブランカの空港に着任。僚友（先輩）のリゲルとの訓練飛行中。

アントワーヌが操縦する

アントワーヌ　「なんて青いんだ。これがアフリカの空！ヨーロッパとは大違いだ。まだ飛んだ人げ少ない新雪のような、いや、熱風が足跡を消しとばした砂漠のような空！この日、この時、この瞬間にサハラ砂漠の上を飛んでいる飛行機が何台いるだろう？永遠に続くような広大な砂漠！もっと、もっと高く飛んだらアラビアの海が見えるんだろうか？ああ、そんな風に思ったら、もう衝動を止められない！」

リゲルの飛行機がやってくる。何かを怒鳴っている。

リゲル　「おい！新人！おい！」

アントワーヌ、リゲルに手をふる。

アントワーヌ　「僕は少し上空を散歩してくるよ！」

アントワーヌが操縦桿を上げ、機体を上空に向かわせる。

リゲル　「おい新人！」
アントワーヌ　「そんなにのんびりしていたら、僕は捕まえられないよ！」

アントワーヌ。楽しそうに飛び立ってゆく。

転

2

カサブランカの飛行場。パイロットの控え室。
リゲルとアントワーヌが向き合って神妙な顔つき。

リゲル　「カサブランカに着任して、最初のテスト飛行だよねぇ？」
アントワーヌ　「はい」
リゲル　「二機で様子見で決められたルートを飛ぶって話だったよねぇ？」

アントワーヌ　「はい」
リゲル　「なんでえっと、なんだっけ？」
アントワーヌ　「はい？」
リゲル　「名前」
アントワーヌ　「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリです」
リゲル　「アントワーヌドサンペリリペペ……長えよ。何？いいとこの子？」
アントワーヌ　「貴族としてはうちなんかとてもとても。大したことなくて」
リゲル　「何自然に自慢話ぶっ込んでるの？」
アントワーヌ　「自慢だなんてそんなつもりは」
リゲル　「ともかくさ、今日は一緒に並んで飛ぶだけって話だったじゃない？」
アントワーヌ　「はい」
リゲル　「なんで勝手に高高度飛んじゃったりしてるのさ？」
アントワーヌ　「……つい？」
リゲル　「つい？」
アントワーヌ　「アフリカの空青いな？なんかもっと高いところ飛びたいな？操縦桿上げたら飛行機上がるな。上げちゃおうかな？と思った時には上げてました」
リゲル　「操縦桿あげたら飛行機上がるね」
アントワーヌ　「ハイ！」
リゲル　「あげねぇの。普通は。仕事で飛んでるんだから。そんな奴は今まで一人もいなかった。いや一人いた」
アントワーヌ　「え？誰ですか？」
リゲル　「目の前にな！」

リゲル、アントワーヌを指差す。

アントワーヌ　「メノマエニさん？」
リゲル　「お前しかいねぇっていってるの！」
アントワーヌ　「え？」

マルシャルがやってくる。

マルシャル　「おいおいリゲル、新人いじめか？」
リゲル　「ちげえよ。こいつがフリーダムすぎるんだよ」

マルシャル、アントワーヌを見て

マルシャル　「新しい人？整備班のマルシャルだよ」

マルシャル、握手を求める。アントワーヌ握手を受ける。

アントワーヌ　「よろしくお願いします。アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリです」

マルシャル　「長いね。アント？」
アントワーヌ　「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリです」
マルシャル　「サン＝テグ？ああ。王子って呼ばれてる人？」
リゲル　「王子？」
マルシャル　「トゥールーズのやつに聞いたよ。なんか浮世離れしてるっていうかあれなの
　と、あと名前が長いんで王子って呼んでたんだって」
アントワーヌ　「ちょっとその言い方、嫌いなんでやめてくれませんか？王子とかじゃない
　んで」
マルシャル　「あ、いやなの？そう呼ばれるの？」
アントワーヌ　「なんかバカにされている気がするんですよね」
マルシャル　「まあねぇ」
リゲル　「……王子」
アントワーヌ　「やめてくださいよ」
リゲル　「俺も王子って呼ぶことにする」
アントワーヌ　「そういうの、よくないと思うんですけど」
リゲル　「言われたこと守って仕事が認められたらちゃんと名前で呼んでやるよ。王子」

　リゲル、去る。
　不満そうなアントワーヌ。
　マルシャル、そんなアントワーヌの姿を見て

マルシャル　「頑張ってね。王子」
アントワーヌ　「王子ってやめてください」
マルシャル　「ひょひょひょひょひょ」

　マルシャル、笑いながら去る。

アントワーヌ　「……」

　アントワーヌ、部屋を出て外へ。
　夕日が沈む時間。

アントワーヌ　「綺麗だな。夕日を見ているとなんだか寂しい気分に……。いや、なってど
　うする！僕はやっと飛行機を職業にしたんだ！ねぇ。何がなんでもしがみついてやるぞ」

　遠巻きにキツネがやってくる。アントワーヌの様子を観察するかのように。
　アントワーヌ、キツネに気がつく。

アントワーヌ　「キツネだ！いや、ちょっと違う？耳が長い。キツネだよね？（呼ぶ）キツ
ネ」

　キツネ、そろそろとアントワーヌに近づいてくる。
　アントワーヌ、腰を下ろし、手を出す。
　キツネがその手を覗き込む。手には何もないのでキツネがアントワーヌを「ないよ？」と
　いう感じで見る。

アントワーヌ　「何もないよ。騙された？」

　キツネ、去ろうとする。

アントワーヌ　「あるよ。あるある」

　アントワーヌ、ポケットからビスケットを取り出し、キツネに与える。
　キツネ、ビスケットを食べる。

アントワーヌ　「僕はアントワーヌ。アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ。郵便飛行士
だよ。これからよろしくね」

転

3

　アントワーヌが着任して2ヶ月ほど経った頃。
　モロッコ上空。
　アントワーヌ、機関士のマルシャルとともに郵便飛行の任務中。

アントワーヌ　「カサブランカに配属されて2ヶ月。フランスからの郵便物を運ぶすでに幾
　度となく往復した行路。頬に冷たく当たる朝霧は太陽の支配力の強いこの地では間も無く
　姿を潜めることになるだろう。左手に広大な砂漠。右手に荒く波たつ海。静と動の景色の
　狭間、海上の雲間からもれる光が波を照らし絹の織物を思わせる。絹を裁つハサミのよう
　に進む。すっと一点を集中する緊張感が心地よくもあるとき。だが今日は少し状況が違っ
　た。エンジンが機嫌を損ねてしまっている。整備は万全でも飛行機とはそういうことのあ
　る乗り物だ。緊急の事態に備えてエンジンを整備する機関士が同乗していることが多い。
　幸いなことに今日も機関士のマルシャルと共に任務についていた。私は彼を驚かせること
　が無いよう。できる限り冷静にエンジンの不調を伝えた」

　実際の状況。

アントワーヌ　「どうする！？エンジンの回転数があがらない！」
マルシャル　「スロットルは？」
アントワーヌ　「べた押ししてる！」

大きく揺れる機体。

アントワーヌ　「わぁ！」
マルシャル　「機体立てるな！水平、水平！操縦桿！」

アントワーヌ、操縦桿を引き、時に押し、必死に機体を水平にたもつ。

アントワーヌ　「ぐ！ぐぐぐ……」
マルシャル　「近くで降りられそうな場所ありそうか？」
アントワーヌ　「話しかけないでくれ！」
マルシャル　「そんなわけいかないだろ！平なところはあるか？降りれるところ？」
アントワーヌ　「今？」
マルシャル　「今ー！」

アントワーヌ、必死で操縦桿を操作しながら、周囲を見る。

アントワーヌ　「行路は間違いなく飛んでる。ここがどこかって言われたらカサブランカまではまだあるあたり？って感じ？」
マルシャル　「ええ？困るな。しょうがない。この先も平だと信じて、降りて」
アントワーヌ　「え？そんな。デコボコしてたらアウトでしょ？」
マルシャル　「だったら思い出せよ行路の状況を！」
アントワーヌ　「降りないとだめ！？」
マルシャル　「そう！一回おりてエンジン見ないとこりゃだめだ」
アントワーヌ　「カサブランカまでもたない？」
マルシャル　「もたないね」
アントワーヌ　「降りてどうにかなるの？」
マルシャル　「伝達系の故障だと思うんだ。５分ありゃ再出発できる」
アントワーヌ　「ほんと？」
マルシャル　「駆動系だったらダメだな」
アントワーヌ　「ダメ？ダメって？」
マルシャル　「救助隊がパーツ持ってくるまで遭難だ」
アントワーヌ　「ええ？マルシャルの見立てだとすぐなおるんだよね？」
マルシャル　「祈れ！そうだと信じて、まずは降りろ」
アントワーヌ　「降りた飛行機を襲う悪い部族もいるらしいじゃない？砂漠には」
マルシャル　「そんな奴らばかりじゃないよ。大半は商人。キャラバンだ」
アントワーヌ　「良い現地民と悪い現地民に出会う確率どれくらい？」
マルシャル　「半々くらいか？」
アントワーヌ　「５０％？多い！」
マルシャル　「会ったらだ！誰とも合わないことの方が大半だ！砂漠は広い！出くわさないと祈っておりろ！」

アントワーヌ　「ぐ……わかりました！」

転。

カサブランカの飛行場。パイロットの控え室。
アントワーヌ、仕事を終え、休憩中。顔にタオルを置き、疲弊している。
かたわらのテーブルに今日の飛行での出来事を文章にしたメモ紙。
リゲルがやってくる。リゲルも仕事終わり。

リゲル　「よう。王子。お疲れ」
アントワーヌ　「王子はやめてください」
リゲル　「今日はトゥールーズからカサブランカまで飛んだんだって？」
アントワーヌ　「はい」
リゲル　「どうよ久々のフランスは？おねえちゃんがいる店とか行ったのか？」
アントワーヌ　「そんな余裕ありませんよ」
リゲル　「一度、砂漠に降りたんだってな？よかったじゃねぇか。たいした故障じゃなくてさ」

リゲル、アントワーヌのメモ紙を手に取り、文章を目で追う。

リゲル　「王子もここで働き出して２ヶ月くらいになるか？」
アントワーヌ　「王子はやめてください」
リゲル　「最初はどうなることかと思ってたけどよ。思ってたより、ちゃんとやってるよな」

アントワーヌ、タオルを外し、リゲルを見る。

アントワーヌ　「ありがとうございます」
リゲル　「頑張ってるけどよ。向いてねえんじゃねぇの？」
アントワーヌ　「今日はエンジントラブルで仕方ないでしょう？」
リゲル　「普段だってさお前、毎回飛んだあとすげえヘトヘトじゃん？そんなに頑張んねえとちゃんと飛べねえの、やっぱ向いてねえんじゃねえの？」
アントワーヌ　「そんなことはないですよ。やれます」
リゲル　「普通は少し余裕が出てくるもんだけどなぁ。２ヶ月もすると」
アントワーヌ　「個人差はありますよ。絶対うまくなります」

リゲル、メモ紙を読み上げる。

リゲル　「だったらよぉ。小説はやめて、もっと飛ぶことに集中した方がいいんじゃねえか？」
アントワーヌ　「それは」

リゲル　「『エンジンの回転数は一向に変化をしなかった。だが、私には死の恐怖はなかった。

荒れ馬のように突如獰猛になった愛機を時に強く、時になだめ、さながら綱渡りがバランスを取るかのように機体を制御し、富士着地を探した』

アントワーヌがリゲルからメモを取り上げる。

リゲル　「王子にかかるとエンジントラブルも冒険物語だな」
アントワーヌ　「王子はやめてください」
リゲル　「なんか色々書いて送ってるんだろ？パリの出版社に？」
アントワーヌ　「それは仕事が終わった後にやってることで」
リゲル　「仕事、終わった後も訓練しねぇとうまくはならねぇんじゃねえの？」
アントワーヌ　「いや、でも」
リゲル　「趣味ってわけじゃねぇんだろ？書く方もさ」
アントワーヌ　「できればそちらも職業に」
リゲル　「二股かけられる腕じゃねぇんじゃねえの？どっちかに集中した方がさぁ」
アントワーヌ　「……」

マルシャルがやってくる。

リゲル　「おう。大変だったみてえだな」
マルシャル　「そうなんだよ。まあ、頑張ったよな王子」
アントワーヌ　「王子はやめてください」
マルシャル　「聞いた？それより？」
リゲル　「女か？」
マルシャル　「ニュース。ニュース」
リゲル　「女か？」
マルシャル　「違うよ。新人が配属されるってよ」
リゲル　「機関士のか？」
マルシャル　「パイロットだよ」
リゲル　「パイロット？」
マルシャル　「若いらしいよ」
リゲル　「またかよ」
アントワーヌ　「後輩？」
マルシャル　「王子はいくつだっけ？」
アントワーヌ　「王子はやめてください。２６です」
マルシャル　「じゃ、そいつの方が年下かな２５手前だって」
アントワーヌ　「後輩か」
リゲル　「そんな立場じゃねぇだろ王子は」
アントワーヌ　「王子はやめてください。え？」
リゲル　「あ？」
アントワーヌ　「でも、今、パイロット足りてません？」
リゲル　「そうだよな。欠員出てたか？」

マルシャル　「噂だとさ。凄腕だって話なんだよ。軍のエリートチームに入れたのを蹴ってウチに来たんだとかさ」
リゲル　「なんでだよ。軍に行けよ」
マルシャル　「だからあれなんじゃない？人は足りてるけど雇っとこうってことなんじゃない？」
リゲル　「うちの会社にそんな余裕あんのか？」
アントワーヌ　「あるいは成績の悪いパイロットと入れ替えで」
リゲル　「あーなるほどな」

リゲルとマルシャルがアントワーヌを見る。

アントワーヌ　「え？僕？」

リゲル、アントワーヌの肩をたたく。

リゲル　「短い間だったがありがとうな」
マルシャル　「忘れないどくれよ」
アントワーヌ　「いやいや聞いてないですよ。嫌ですヤダ！」
マルシャル　「王子は文章書くのとか得意だし、事務方でも出世でるるんじゃないの」
リゲル　「だな」
アントワーヌ　「僕は飛行機に乗るためにこの会社に入ったんです！絶対譲りませんから！後、王子っていうのはやめてください！」
マルシャル　「頑なだね」
リゲル　「人事は会社が決めることだからな。ま、辞令が出ないことを祈るよ。がはは」

リゲル、去る。

マルシャル　「偉くなったら支給のワインの質あげてくれよな」

マルシャルも去る。

アントワーヌ　「嫌ですから！この行路で僕が一番……この仕事に誇りを持ってるんですからね！」

飛行場の外。

キツネがやってくる。
アントワーヌ、キツネに向かって自問自答。

アントワーヌ　「資格はあると思うんだ。うん。会社は僕をパイロットとして雇ったんだし。ダメってことはないと思うんだ」

キツネ　「やらせてみたら、ダメだったってこともあるじゃないか」
アントワーヌ　「あんなにみっちり研修して正式採用になったんだぜ」
キツネ　「研修と実際の勤務は違うさ。この２ヶ月で身に染みたろ？」
アントワーヌ　「まあね……大丈夫だよね？」
キツネ　「俺はお前の自問自答なんだから想定外にショックを受けるような言葉は出てこないよ」
アントワーヌ　「客観的に答えてよ」
キツネ　「ムリだよ。所詮自分だよ」
アントワーヌ　「甘やかさないでくれ」
キツネ　「面倒臭い奴だよね」
アントワーヌ　「知ってる」
キツネ　「書く方は人より達者じゃないか。小説家に絞ったら？」
アントワーヌ　「せっかく空を飛ぶ資格を得たのに自分から手放せっていうの？僕ほど空を欲しているものはいないというのに！」
キツネ　「じゃ、小説家は諦めてパイロット一本に絞るっていうのは？」

アントワーヌ、首を横にふる。

アントワーヌ　「僕はパイロットとして体験した、誰もが得られるわけでない経験を書くんだ。そんな作家、二人といるかい？僕に物語を書かせるのは時代の必然だよ」
キツネ　「出版社はまだ必然とは思ってないみたいだけど」
アントワーヌ　「今、準備している小説を読めば彼らも考えを変えるさ」
キツネ　「その小説はいつ仕上がるの？」
アントワーヌ　「この激務の中、いつ書けばいいっていうんだ」
キツネ　「結局」
アントワーヌ　「何？」
キツネ　「どっちからも見放されたら？」
アントワーヌ　「え？」
キツネ　「二つを追いかけて。結局どっちも物にならない。そういう人生だってあるだろ？」
アントワーヌ　「……あるね」

アントワーヌ。膝を抱える。

アントワーヌ　「僕は何かになれるんだろうか」

キツネ、アントワーヌの周りをぐるっと回る。

キツネ　「小説家。パイロット。それだけじゃないんだろ？」
アントワーヌ　「え？」
キツネ　「恥ずかしがるなよ。俺は知ってるぜ。お前が欲しいもの」
アントワーヌ　「本当に？」

キツネ　「忘れるなよ。俺はお前の心のうちなんだぜ。誰もいねぇよ。言ってみろよ」
アントワーヌ　「……特別な花」
キツネ　「もっとわかりやすく」
アントワーヌ　「真に心から分かり合える女性。運命の人」
キツネ　「欲張りだなぁ」
アントワーヌ　「パイロットを続けながら小説を発表できて、そばに最愛の人がいてくれたら他に何もいらない」
キツネ　「欲張りだよ」
アントワーヌ　「欲張りなのかなぁ」

飛行機がやってくる音。

アントワーヌ　「あれ？今日はもう降りる機はないはずじゃ？トゥールーズから？」

飛行機が着陸する音。そして、静寂。
飛行機を降りて、エラーブルが歩いてくる。

エラーブル　「こんにちは」
アントワーヌ　「こんにちは」

キツネ、去る。

エラーブル　「あ、脅かしちゃったかな」
アントワーヌ　「大丈夫。明日も来るよ」
エラーブル　「なついてるんだね。餌をやってるの？」
アントワーヌ　「うん。話相手になってもらってるんだ」
エラーブル　「しゃべるキツネかい？」
アントワーヌ　「ううん。ひとりで自問自答。キツネに吹き替えして」
エラーブル　「面白いね」
アントワーヌ　「そう？怖いってよく言われるけどね。えっと」
エラーブル　「あ、ごめん。今日からこちらでお世話になるエラーブルです」
アントワーヌ　「新しいパイロット？」
エラーブル　「そう」
アントワーヌ　「僕もパイロット」
エラーブル　「そうなんだ！よろしく！ねえ、ここにサン＝テグジュペリという人がいるんでしょ？」
アントワーヌ　「え？」
エラーブル　「今日は出勤してる？もしかして飛んでる？」
アントワーヌ　「いや、いるよ。あの、僕がそう」
エラーブル　「え？」
アントワーヌ　「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ」

エラーブル　「あなたがサン＝テグジュペリさん？最初に会えたパイロットがあなただなんて」
アントワーヌ　「どうして僕のことを？」
エラーブル　「パリにいた時、あなたの小説を読んだんだ」
アントワーヌ　「え？まさか？」
エラーブル　「あなたが書いたんじゃないの？」
アントワーヌ　「書いた小説はあるけど……刷った部数は少ないし。よっぽどの活字好きでもなければ目に入らないと思うんだけど」
エラーブル　「そうだね。僕が読めたのもたまたま。飛行機を題材にした読み物があるって教えてくれたやつがいてさ。そいつは善意で教えてくれたんだろうけど、こっちからすれば、はぁ？机にかじりついてる物書きに飛行機の何がわかるってんだ？って思うじゃない？」
アントワーヌ　「ああ、わかるよ。戦記物なんかでもひどい描写が多いよね」
エラーブル　「そうそう！でも、君のお話は違った！なんと言うか血が通った…リアルだった！」
アントワーヌ　「え？そう。まあ、やっぱり、実際を知っているからね」
エラーブル　「飛行機乗りで小説家。そんなやつ他にいないよ」
アントワーヌ　「え、うん。ありがとう」
エラーブル　「王子って呼ばれてるって聞いたけど僕もあなたをそう呼んでいいかい？」
アントワーヌ　「あーうん。いや、その呼ばれ方はあんまり好きじゃないんだ」
エラーブル　「そうしたらサン＝テグジュペリと呼んだ方がいい？」
アントワーヌ　「親しい連中はサンテックスって」
エラーブル　「サンテックス。いいね。僕もその名前で呼ばせてもらっていいかな？」
アントワーヌ　「もちろんだとも」
エラーブル　「よろしくサンテックス」
アントワーヌ　「こちらこそエラーブル」

二人、かたい握手

転

二人、空を飛ぶシーン。

エラーブル　「サンテックスは本当に楽しそうに飛ぶね」
アントワーヌ　「そうかい？」
エラーブル　「仕事で飛ぶときはどうしてあんなにガチガチなのさ」
アントワーヌ　「長距離飛行は違うよ。エンジンが止まるかもしれないし、急に天候だって変わる」
エラーブル　「その時はその時さ」
アントワーヌ　「ええ？」
エラーブル　「それも楽しめばいいんだ」

アントワーヌ　「そうか。……エラーブル」
エラーブル　「何？」
アントワーヌ　「君はどうしてこの仕事を選んだんだ？」
エラーブル　「君と一緒だよ。飛ぶ以外は論外だ」
アントワーヌ　「軍の仕事だって飛べたろ？」
エラーブル　「手紙は届けば嬉しいもんだ。それを運ぶっていうのはいい仕事じゃないか」
アントワーヌ　「まあね」
エラーブル　「人同士が争う仕事よりはだいぶいい」
アントワーヌ　「そうだね」

転

4

一月ほどのち。
カサブランカの飛行場。飛行士の控室。
イスに座りテーブルに向かい手紙を書いているアントワーヌと傍にエラーブル。
アントワーヌ、エラーブルの恋人への手紙の代筆を頼まれている。

エラーブル　「大先生に代筆をお願いできるとは僕は幸運だ」
アントワーヌ　「大先生はやめてくれよ」
エラーブル　「文章は読むのは好きだけど書くのはどうもね。だからさんテックスのことほんとにすごいと思ってるよ」
アントワーヌ　「フフ。でもエラーブルに熱烈なラブレターを出す相手が居たなんて」
エラーブル　「そんなんじゃ無いよ。そんなんじゃ無いけど、ほら、ずっと離れて仕事してるだろ？だから」
アントワーヌ　「変わらぬ愛情を伝えるべく、思いの深い内容、熱い気持ちを載せた手紙を書く」
エラーブル　「そう！砂糖たっぷりのコーヒーのような」
アントワーヌ　「砂糖たっぷりね」

アントワーヌ、代筆の手紙を書き進めていく

エラーブル　「さらさらとすごいねぇ」
アントワーヌ　「こんなのたいしたことない」
エラーブル　「そんなことない。才能だ」
アントワーヌ　「君の操縦技術みたいなのを才能っていうんだ」
エラーブル　「まあね」
アントワーヌ　「認めるんだ」
エラーブル　「謙遜したってしょうがないだろ」

アントワーヌ　「そうか」
エラーブル　「君だってもっと上手くなるさ」
アントワーヌ　「お為ごかしはやだよ」
エラーブル　「俺は嘘は言わないよ」
アントワーヌ　「そうか。エラーブルがそう言ってくれるなら。うん。頑張るか」
エラーブル　「頑張れ。飛行士で作家なんて君しか居ないんだから」
アントワーヌ　「どんな女（ひと）なの？」
エラーブル　「何？」

アントワーヌ、手紙を持ち上げる。

エラーブル　「ああ。そうだね。なんてことはないよ。離れててもさ。口説くような男も居ないだろうなあって心配しなくて良いくらいの。どこにでも居そうな娘だよ」
アントワーヌ　「でも。世界でその娘の代わりはどこにも居ないんだろ？」
エラーブル　「……まあね」
アントワーヌ　「うらやましい」
エラーブル　「君には居ないのか？」
アントワーヌ　「結婚を約束をした人はいたけど」
エラーブル　「おお」
アントワーヌ　「ダメだった」
エラーブル　「あー。今は？」
アントワーヌ　「いないよ」
エラーブル　「片思いでもさ。いるんだろ？そういう娘なら」
アントワーヌ　「どうだろう。友達の妹に手紙を出したりはしてるんだけど……」
エラーブル　「いるじゃん。脈はあるのか？」
アントワーヌ　「ここに来てから十何通出して、この間やっと返事が来たんだ」
エラーブル　「おお」

アントワーヌ、（片思いの相手・ルネ・ド・ソシーヌの）手紙を取り出しエラーブルに渡す。

エラーブル　「あ、持ってるんだ。返事の手紙？」

アントワーヌ、うなづく。
エラーブル、手紙を開く。

エラーブル　「読んで良い？」

アントワーヌ、うなづく。

エラーブル　『ご機嫌よう。こちらは変わらずです。あなたもお元気でお過ごしください』
……これだけ？」

アントワーヌ、うなづく。

エラーブル　「ほか探した方がいいかもな」
アントワーヌ　「え？ひどい」
エラーブル　「俺、嘘は言えないから」

エラーブル、アントワーヌに手紙を返す。

エラーブル　「さて、そろそろ行くよ」
アントワーヌ　「今日はダカールまでだっけ？」
エラーブル　「帰ってくるまでには手紙大丈夫？」
アントワーヌ　「三日後だろ？任せて。そして、それを僕がフランスまで運ぶから」
エラーブル　「そうか。頼むね。じゃあサンテックス」
アントワーヌ　「うん。気をつけてエラーブル」

二人、ハイタッチ。
エラーブル去り、アントワーヌ、再び手紙に向かう。

エラーブルの飛行機が飛び立つ音。
アントワーヌ、音のする方角を見てのち再び手紙に向かう。

時間が経過する。
日がかげる。（その日の夕方のように思われるが数日経っている）

マルシャルがやってきてアントワーの姿を見つける。
マルシャル、そっと近づいて肩に手を置く。
アントワーヌ、振り返りマルシャルを見る。

マルシャル、イスに座る。

マルシャル　「エラーブルの奥さんに書いてる手紙？」
アントワーヌ　「恋人。籍は入れてなかったんだって」
マルシャル　「そうか。大変だな」
アントワーヌ　「元から代筆を頼まれてたから」
マルシャル　「そうか」

マルシャル、便箋と封筒を取り出しアントワーの前に出す。
アントワーヌ、便箋を見、マルシャルを見る。

マルシャル　「あのさ王子」

アントワーヌ　「王子はやめてください」
マルシャル　「悪い。あのさ、エラーブルと乗ってた俺の同僚の機関士の家族に送る手紙もさ、お願いできないかな」
アントワーヌ　「……いいですよ」
マルシャル　「そうか。ありがとう。恩に着る」

アントワーヌ、再び手紙を書き進め始める。

マルシャル　「飛行機っていうのは落ちるもんなんだよ。いくら整備しても。万全にしても。気をつけても。一定の割合で落っこちるもんなんだ。腕がいいパイロットだって。死ぬときは死ぬんだ」
アントワーヌ　「わかってます。自分じゃなかった。それだけだって」
マルシャル　「そうさ。俺たちはあんたらパイロットに命を預ける。俺らは飛び立った飛行機をどうあっても地上に戻す。それだけだ。じゃあ頼むな」

アントワーヌ、うなずく。
マルシャル、去る。

アントワーヌ、手紙を持って外へ。
見るともなし景色を眺める。
キツネがやってくる。

アントワーヌ、キツネの相手をする。
そうしながら、アントワーヌ泣き始める。

キツネ　「悲しいことがあったのか？」
アントワーヌ　「エラーブルが死んだ。墜落だ」
キツネ　「そうか」
アントワーヌ　「いいやつだった。ここで死んでいいやつじゃなかった」
キツネ　「そうか」

アントワーヌ、涙が止まらない。

キツネ　「危険な仕事だな」
アントワーヌ　「わかってる」
キツネ　「本当か？」
アントワーヌ　「わかってたつもりだった」
キツネ　「やめた方がいいんじゃないか。こんな仕事？」
アントワーヌ　「やめない」
キツネ　「やめないか」
アントワーヌ　「やめない。飛ぶことは僕の人生だから」

転　5

エラーブルの事故からしばらく後。
砂漠。午後遅い時間。
リゲルとマルシャルの乗った飛行機が故障で砂漠に不時着。
反抗部族に殺されかねない状況。

マルシャル　「ダメだ交換のパーツがないと飛べない」
リゲル　「ええ。どうするんだよ！こんな砂漠の真ん中でよ！」
マルシャル　「状況は通信できたから。パーツを持った救助隊が来てくれることを祈るしかないよ」
リゲル　「ええ。大丈夫なのか？ここいら前に不時着したやつが反抗部族にぶっ殺されたとこだろ？」
マルシャル　「出くわさないよう祈るしかないね」
リゲル　「なんだよそれ。俺は死にたくないからな！」

リゲル、飛行機から棒のようなものを持ち出し構える。
マルシャル、日除けなどを準備しつつ砂漠に腰をおろす。
マルシャル水筒から水を飲んだり、リゲルにも水を渡したり。
リゲル、落ち着かず焦っている。

日が陰ってゆく。

リゲル　「もうダメだ。俺は死ぬんだ。やだ、死にたくない！」
マルシャル　「遺書でも書いとくかい？」
リゲル　「そんなもの書きたくない！」
マルシャル　「ん」

マルシャル立ち上がり、耳を澄ませる。

リゲル　「どうした？」
マルシャル　「プロペラ音だ」
リゲル　「本当か！？」
マルシャル　「間違いない。ほら」

リゲルも耳をすます。
飛行機の音が近づいてくる。

リゲル　「ほんとだ！救助だ！」
飛行機がすぐ近くまでやってくる。
リゲルとマルシャル手を振る。
リゲル　「おおい！ここだぁ！」
飛行機、着陸し、アントワーヌが部品の入った箱を持ってやってくる。
リゲル　「王子〜！」
リゲル、アントワーヌに抱きつく。
アントワーヌ　「王子はやめてください」
リゲル　「わかったよ王子」
アントワーヌ　「だから」
マルシャル　「パーツは？」
アントワーヌ　「これです」
アントワーヌ、マルシャルにパーツを渡す。
マルシャル　「よし」
リゲル　「頼むぜ。とっとと直して早く帰ろうぜ」
マルシャル　「そうそうは無理だよ」
リゲル　「日が暮れるんだぞ！？」
アントワーヌ　「野営の準備をしましょう」
リゲル　「ここで一夜を明かすのか！？いつ襲われるかもしれねぇんだぞ！」
アントワーヌ、ピストルの入ったホルダーを取り出して見せる。
アントワーヌ　「一応、預かってきました。何かの時は」
リゲル　「集団で襲われたら意味ねぇだろ。奴らだって銃なんか持ってるんじゃねぇの？」
アントワーヌ　「威嚇ぐらいにはなると思います」
リゲル　「やだよ。俺〜」
アントワーヌ。リゲルにピストルを渡す。
二人、野営の準備。
焚き火を焚き、お湯をわかし、コーヒーをいれる。
夜が訪れる。

マルシャルが戻ってくる。
親指を立てて「直った」とポーズ。
リゲルとアントワーヌ拍手。
アントワーヌ、マルシャルにコーヒーを入れ手渡す。
三人、焚き火を囲むように座る。
リゲルはピストルのホルダーを抱えて周りをキョロキョロと怯えている。
アントワーヌは星空を見上げ、この状況を特別な状況としてなんだか感慨を感じている。
マルシャル　「落ち着けよリゲル」
リゲル　「落ち着いてられっかよ！なんで落ち着いてられるの？むしろ！」
マルシャル　「しょうがないじゃない？朝を待つしかないんだから」
リゲル　「だからってさあ」
マルシャル　「落ち着けよ」
リゲル　「飛行機乗りなんかなるんじゃなかった」
マルシャル　「そっから？」
リゲル　「郵便飛行機なんてなくたってどうにかなるじゃんよ。船で運べるんだから」
アントワーヌ　「知らせを一日でも早く待っている人もいますよ」
リゲル　「そおかわりに何人死んでるんだ。こんなにパイロット殺してまで飛ばす必要なんかあんのか、その手紙に」
アントワーヌ　「それ言っちゃうと会社の存在否定になっちゃいますよ」
マルシャル　「そのうちさ、アフリカだろうが南米だろうがアジア？どこにでも電話できるようになったらこんな飛行機で手紙運んでたなんてあいつら馬鹿だなとか思われるんだろうね」
リゲル　「電話が？そんなことになるのか？」
マルシャル　「なるだろうよ。そのうち写真とかもさ、送れるようになるんじゃないか？」
リゲル　「まさかぁ」
アントワーヌ　「ジュールベルヌの世界ですね」
マルシャル　「何やってんだろうね。俺たちはさ」
リゲル　「全くだ」
アントワーヌ　「そうしたらこんな夜もなくなっちゃうですね」
リゲルとマルシャルがアントワーヌを見る。
リゲル　「何笑ってんだよ？こんな時に」
アントワーヌ　「こんな時なのはわかってますけど。笑おうが喚こうが朝を待つしかない時間じゃないですか？」
リゲル　「ハァ？」
マルシャル　「まあ、そうだね」

アントワーヌ立ち上がる。
風が砂を飛ばし、空には月と星。
見渡す限り彼らしかいない世界。

アントワーヌ　「このとんでもない風と星と砂の世界で、朝がくるのだけを待つ時間。こんな時間、この先何度ありますかねぇ」

リゲル　「何言っちゃってんの？このバカ王子は？」
アントワーヌ　「バカかもして無いですけど王子じゃなりません」
マルシャル　「バカはいいんだ」
アントワーヌ　「歌でも歌いますか？」
リゲル　「歌ぁ？」
アントワーヌ　「得意な歌はありませんか？」
マルシャル　「そうだねぇ」
リゲル　「何、お前まで」
マルシャル　「いいんじゃねぇの？朝まで時間潰しで。はいリゲルから」

マルシャル、リゲルにスパナを手渡す。
リゲル、スパナをマイクに見立てて何か歌おうとするが

リゲル　「やらねえやらねえ」
マルシャル　「リゲル～」
リゲル　「俺は音痴なんだ」
アントワーヌ　「じゃ、歌じゃなくてお芝居をしましょう」
リゲル　「芝居？」
アントワーヌ　「子供の頃、よく兄弟でやったんです。母さんに見てもらって、ドラゴン退治の冒険やカリブ海の海洋探検」
マルシャル　「家族で芝居なんて王子エピソードだな」
アントワーヌ　「やりましょうよ？どうせ時間はあるんだから」
リゲル　「そんなドラゴンだなんだ子供みたいなことができるか」
アントワーヌ　「じゃ、リゲルさんの家族の話をやりましょう？思い出のエピソードを。お母さまはどんな方ですか？」
リゲル　「え？母ちゃん？いや、やんねえって」

アントワーヌ、想像でリゲルの母親を演じる

アントワーヌ　「この子ったら何やってるんだい？ぐずぐずしてたら尻を叩くよ」
マルシャル　「何？」
アントワーヌ　「こんな感じですか？お母さま？」
リゲル　「バカいえ、うちのママは優しいんだよもっと」
アントワーヌ　「優しい。そうですか。優しいにもいろいろあると思うので、ちょっと見本

を見せてくれませんか？」
リゲル　「そうだなぁ（母親のマネをして）おかえり。よく無事で帰ってきたねぇ。お腹すいたろ？……」
アントワーヌ　「（リゲルの物真似をして）おかえりさなさい。よく無事で」
リゲル　「悪く無いね」
マルシャル　「アハハ」

そんなやりとりを続きながら、夜がふけてゆく。

少し離れた場所からキツネとエラーブルがその様子を見ている。
キツネがエラーブルの表情を見るように見上げる。
エラーブル、キツネの頭を撫でる。

転

6

リゲルの不時着から無事に生還し、二月ほど過ぎた頃。
カサブランカの飛行場。飛行士の控室。
テーブル脇のイスに座り辞令を眺めているアントワーヌ。

アントワーヌ　「……ハァ」

リゲルがやってくる。

リゲル　「なんだ？王子？アンニュイじゃねぇか」
アントワーヌ　「アンニュイなんて言葉知ってるんだリゲル」
リゲル　「うちのママは詩が好きなんだよ」
リゲル　「何それ」

アントワーヌ、リゲルを見る。

アントワーヌ　「あ」

アントワーヌ、とっさに辞令を隠す。

リゲル　「……女か」
アントワーヌ　「は？違いますよ」

リゲル、アントワーヌから手紙を奪おうとする
アントワーヌ、辞令を守る。

リゲル　「パリの子か？」
アントワーヌ　「違いますって」
リゲル　「友達の妹なんだって？」
アントワーヌ　「違いますって」
リゲル　「違うのか？リネットじゃない子か？」
アントワーヌ　「手紙じゃないんですって……なんで文通相手の名前知ってるんですか？」
リゲル　「お前がキツネに愚痴ってるのを誰かが聞く。別の誰かも聞く。俺も聞く。王子が
　あんなことキツネに言ってた。俺が聞いたのは、俺のときはこんなこと話してた、とな」
アントワーヌ　「つなぎ合わせると大体わかると？」
リゲル　「そういうこと。だから俺たちと王子の間に隠し事はよそうぜ」

リゲル、アントワーヌから辞令を取り上げる。

アントワーヌ　「あ！」
リゲル　「いただき～」

リゲル、辞令をさっと読む。

リゲル　「これ手紙じゃねえじゃん」
アントワーヌ　「だから違うって言ったじゃないですか」
リゲル　「辞令じゃん？」
アントワーヌ　「そうですよ」
リゲル　「そっか」

リゲル、アントワーヌの肩に手を置く。

リゲル　「あの夜の後も遭難したもんな王子は。でもひでえな降格なんてよ」
アントワーヌ　「リゲルの時は遭難してない。救助。救助でしょ？」
リゲル　「経理か？総務か？本社に行っても俺たちのこと忘れないでくれよ」

マルシャルがやってくる。

マルシャル　「あ、いた。サンテックス。辞令聞いたか？」
アントワーヌ　「ええ」
マルシャル　「向こうでもよろしくな。いや、よろしくお願いします。か？」
アントワーヌ　「敬語はいいですよ。今まで通りで」
リゲル　「なんだ？お前も本社勤務になるのか？」
マルシャル　「は？キャップ・ジュビーだよ」

リゲル　「キャップ・ジュビー？あの岬の中継基地か？え？」

リゲル、アントワーヌの辞令にじっくり目を通す。

リゲル　「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ。貴殿をキャップ・ジュビーの飛行場長
に任ずる……飛行場長？」
マルシャル　「そう」
リゲル　「中継基地のトップじゃん？え？出世？出世なの？なんで」
アントワーヌ　「さぁ」
リゲル　「なんだよ。出世ならもっと楽しそうにしてよ」
アントワーヌ　「いいことないですよ。あの小さな飛行場ですよ。事務仕事が増えるに決ま
ってる。飛べる時間が減る！」
マルシャル　「辞退するの？」
リゲル　「もったいねぇ」
アントワーヌ　「ふふふ。そんなことできませんよ。辞退したら本社の総務勤務の辞令が出
るだけだって言われましたからね。ジュビーの方がまだましだ。くそ！」
マルシャル　「サンテックスがクソなんて言うとはよっぽどだな」
リゲル　「サンテックス？マルシャルおい」
マルシャル　「あ？」
リゲル　「マルシャル、あんたいつから王子のことサンテックスって？」
マルシャル　「ああ。俺たちが遭難してサンテックスが助けに来てくれたろう？あの後くら
いから？」
リゲル　「そうだっけ？」
アントワーヌ　「結構立ちますよ？」
リゲル　「そう？」
マルシャル　「人のことは案外気がつかないもんだな。俺も今気がついたことがあるんだが」
リゲル　「なんだよ？」
マルシャル　「サンテックスだよ」
アントワーヌ　「え？なんです？」
マルシャル　「リゲルが王子って呼んでもやめてくれって言わなくなったな」
アントワーヌ　「そういえば。なんでだろう」
リゲル　「つまんない。王子って言っても怒んないし。お前らジュビーに異動になっちゃう
し！」
マルシャル　「別に所属が変わるだけでリゲルも郵便運んでくるだろジュビー経由でダカー
ルへ」
リゲル　「あーあ。（言い方を変えながら）王子。王子。王子～」
アントワーヌ　「王子っていうのやめてください」
リゲル　「やっぱり嫌なんだ」
アントワーヌ　「そんなわざわざ言わなくていいでしょうってことですよ」

転

7

1927年10月
モロッコの正南端。郵便行路の中継基地の一つ、キャップ・ジュビー。
サハラ（リオ・デ・オロ）の飛地。スペイン領。
キャップジュビーに着任するアントワーヌ。マルシャルも一緒に異動。

マルシャル　「いやぁこう見るとカサブランカは都会だったな」
アントワーヌ　「修道院っていうやつもいるよ」
マルシャル　「そうすると差し詰めここの枢機卿か？サンテックス？」
アントワーヌ　「そんな大層なもんじゃないです。名ばかりの管理職ですよ」

空港主任のルカスの蓄音機がらレコードの音が流れている。

マルシャル　「なんだ？」
アントワーヌ　「空港主任のルカスさんでしょう。あの人一日中、蓄音機でレコードをかけてるって」
マルシャル　「へぇ。さて。ここの同僚に挨拶に行ってくるな」
アントワーヌ　「カサブランカに比べて人が少ないから、うまいことやって」
マルシャル　「はいはい。飛行場長殿」

マルシャル、自分の荷物を持って去る。

アントワーヌ、砂漠の彼方を見る。

アントワーヌ　「大地があり、空がある。つながってる。うん」

キツネがやってくる。

アントワーヌ　「キツネ？ここにもキツネがいる」

アントワーヌ、しゃがみ、キツネに呼びかける。

アントワーヌ　「おいで」

キツネ、警戒しつつ、アントワーヌのもとに。

アントワーヌ　「カサブランカにいた君かい？いや、まさかね……これからよろしく。ここのキャップ・ジュビーの飛行場長アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリだよ。しばらくよ

ろしくね」
キツネ　「ここに何しにきたんだ？」
アントワーヌ　「もちろん空を飛ぶためさ」
キツネ　「それだけ？」
アントワーヌ　「……そのために、この飛行場を維持しないといけない。ここはスペインから間借りしてるから」

アントワーヌ、隣に建っているスペイン軍の砦を見る。

アントワーヌ　「スペイン軍さんとは仲良くしなきゃならない。それから現地の住民たちとも」
キツネ　「どうして？」
アントワーヌ　「反抗されたらさ。こんな砦の外の滑走路なんてひとたまりもないだろ？それに仲間が不時着して悪い部族に捕まったりした時に間に入って助けてくれるかもしれないだろ？」
キツネ　「空を飛ぶのも大変だな」
アントワーヌ　「全くだ。でも仲良くしろって指令だからまだいいね。喧嘩しろだったら辛いよね」
キツネ　「そうだね」
アントワーヌ　「みんなの仲を取り持って。空を飛ぶ。空を飛んで物語を書く。物語を書いて……」
キツネ　「どうするの？」
アントワーヌ　「僕のことを知ってもらう。僕が何に興味があって、僕が生み出す世界を好きな人に出会う」
キツネ　「君の特別な花のことか？」
アントワーヌ　「その中の一人がそうだったら、とても幸福だ」
キツネ　「相変わらず望みがおおいな」
アントワーヌ　「そうかな？んー。一言で言うと……生きるってそう言うことじゃないか？うん。生きるために来た。ここに。うん」
キツネ　「そうか」
アントワーヌ　「うん。さ、ルカスさんに挨拶して、スペインの砦の大尉にも挨拶に行くか」

アントワーヌ、自分の荷物を持って去る。
キツネ、アントワーヌの姿を見届けて去る。

END

参考文献

サン＝テグジュペリ 著・内藤濯 訳『星の王子さま』岩波書店
サン＝テグジュペリ 著・大久保ゆう 訳『あのときの王子くん』青空文庫
サン＝テグジュペリ 著・堀口大学 訳『人間の土地』新潮文庫
サン＝テグジュペリ 著・清水茂 山崎庸一郎 訳
『サン＝テグジュペリ著作集〈4〉母への手紙・若き日の手紙』新潮文庫
アラン・ヴィルコンドレ 著・鳥取絹子 訳『サン＝テグジュペリ 伝説の愛』岩波書店
加藤宏幸「サン・テグジュペリの『母への手紙』の内容と解説」